

村研大会印象記

その1 大会に参加して

新垣たずさ

「ミナマタ」と聞けば水俣病しかうからんでこないほど、公害のイメージが固定化されている。私自身も現地へ赴任するまでそうだった。実際の水俣は、みかん畑と茶畑、温泉の湧く山なみ、市街地を流れ下って、不知火海へそそぐ水俣川、と豊かな自然に恵まれた魅力的な土地である。

その水俣では、現在、地域再生の動きが進みつつある。

私は本大会へは初参加だったが、公害を克服しながら地域再生をめざしつつある水俣地域の今後を考える上で、有益な示唆を得たいという希望が叶えられ、感謝している。

私が興味をもった報告の一つは、高田知和氏の「産業組合員の意識と行動-産業組合を支えたもの」であった。組合の幹部でもなく、その意味では組合の政策や決定に影響力をもたない、一組合員の日記を資料に選び、組合員のいわば、「離れた」立場から産業組合をみるとどうみえてくるのか、そして、一般の組合員はそもそもどんな意識を持ち、どんなふうに行動しているのか。高田氏の報告は、その点を浮き彫りにしようとした試みであった。

これまで水俣病問題は、直接の被害者である水俣病患者と漁民、汚染者であるチッソ、そして汚染被害をくい止められなかった行政当局など、直接の当事者のみの問題を論じるのが常だった。そのため、水俣地域のその他住民は、蚊帳の外におかれることになり、結果として、水俣病患者に対する差別や偏見を温存してきたことは否めない。

そんな水俣病問題に対し、「これは市民全体の問題であり、この問題の解決なくしては地域振興もありえない」という共通の認識が芽生えつつある。

これまで第三者とされてきた一般市民のそうした意識変化は、特記に値する。これまで当事者同士の問題として捉えてきたことによる市民相互のいびつな人間関係を復元するチャンスがめぐってきた。それだけに私は傍観者の立場の市民をどう捉えればいいのか関心をもちつつも、考えあぐねるところがあったが、高田氏の報告を通して、当事者ではない市民にアプローチするための一つの方法を学んだ思いがしている。市民層の客観的な分析・調査にあたって、この手法を活用してみたいと考えている。

また、藤ノ木剛氏の「新潟県津南町における町づくりの」展開と推進主体」という報告からは、「嘆き節はやめてとにかくやっていく」という内発的力を感じた。その他、大川健司氏の「山村自治体の再編と地方分権」、川手督也・西山未真両氏の「家族経営協定と女性農業者の自立」など、教えられることが少なくなかった。

最後になりましたが、私の大会参加のためご配慮下さった吉沢先生をはじめ、みなさまにこの場を借りてお礼を申し上げます。

(国立水俣病総合研究センター
国際・総合研究部社会科学室)